

vol.204

## 坂本真綾

音楽と役者の両方があるから  
今までやってこれた



坂本真綾 [写真一覧\(5件\)](#)

1996年4月に発売したシングル「約束はいらない」でのデビューから、今年3月31日に15周年記念ベストアルバム「everywhere」を発売した坂本真綾。音楽活動と並行して、昨年は「エヴァンゲリオン新劇場版：破」真希波・マリ・イラストリアス役、「FINAL FANTASY XIII」ライトニング役など声優として様々な役を演じてきた彼女が、“表現者”坂本真綾として自らのアイデンティティーを探し続けた15年。その歩みの先に辿り着いた場所とは。

——坂本真綾さんは音楽活動以外にも声優のお仕事など幅広く活躍されていますが、女優さんなど色々な役を演じられていると、「ご本人は、どういう方なのかな？」ってすごく興味がありまして。ご自身で自分のキャラクターについて自覚している部分や、逆に人から言われてギャップを感じるようなことはありますか？

坂本真綾(以降、坂本):何のイメージなのかは分からないんですけど、「ちゃんとしてそうに見える」とか「きっちりしてそう」とか言われたり、柔らかかそうな性格に見られるんですけど(笑)。そういうイメージを抱いていた方からは「意外にパッサリした方なんです」というのが、もう人生において何度耳にしているか分からないフレーズですね。自分でも結構、自覚があるのは、初めての方が多く場では、なかなか自分から溶け込んでいけないタイプなので、緊張したり遠慮したりして、ひっそりしてるつもりなんですけど。それが逆に人から見ると、「あの人、怒っているのかな？」みたいに、とっつきにくい場合もあるみたいですね。だけど、「意外に、話してみると普通」というのが感想みたいです(笑)。

——今回15周年記念ベストアルバムを発売されましたが、お仕事としては音楽活動以前からされていたわけじゃないですか。始めた当時ぐらいの年齢って習い事に近いような感覚があったかもしれませんが、小さい時に将来どんな大人になりたいかイメージはありましたか？

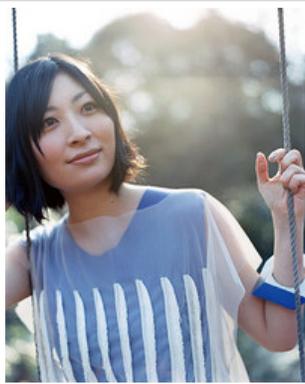
坂本:8歳から演劇に携わってお仕事をしてきたので、漠然とそういう職業に就くビジョンが無いわけではなかったんですけど。逆に、それだけを見てきた訳ではなくて、「スチュワーデスさんになりたい」とか「お花屋さんになりたい」とか「すし屋の奥さんになりたい」とか、色々なことを言っている中の一つが役者という感じでした。でも「早くお嫁さんに

なって」みたいなことよりは結構、自分で働くイメージの方が強かったです。

——音楽活動を始めた当時、どんな歌手になりたい、どんな歌を歌っていききたいというイメージはありましたか？

坂本：とにかく今、自分の目の前にある部分を一生懸命やっていくことだけで精一杯だったのがありますし。私の場合は「歌手になりたい！」と思って、それまで準備をしてきたわけでもなかったし。すごく特殊な形で、不意を突かれて急に歌手の道が開けたので。あまりそういうことを考えている余裕も無いままに16歳という、もう今にして思えばすごく子供だと思っんですけど(笑)、その年齢で歌手の道に入ってしまって、もう何年も先のことは全然想像できなくて。

ただ歌うことが好きだったし、周りのスタッフのことも大好きだったし。自分のことをすごく特徴の無い、つまらない人間だと思っていたんですけど、「そのままでもいい」とすごく認めてくれる人がいる環境が、それだけで幸せで、それ以上の野望も無くて(笑)。本当に最初の、特に10代の時はそれが全てだったような気がします。



写真拡大

坂本真綾 [写真一覧\(5件\)](#)

——5枚目のアルバム「夕凧LOOP」(2005年)から6枚目の「かぜよみ」(2009年)までの3年間だけでも大きな変化を感じていたのですが、15年間の中のターニングポイントや思い出深い出来事はありますか？

坂本：今回30曲を選ぶ中で全部の曲を聴きながら、本当に根底は変わってないんだなと感じたんですけど、自分で思っている以上に多分、リスナーの方達のほうが客観的に色々な変化に気が付くのかもしれませんね。私としては、連続している時間の中での出来事なので、どこかですごく変わったとは思わないのですが、15歳から30歳までの間に自然な形で変化していった一人の人の成長ということ以外では、一番分か

りやすい変化は、デビューからずっと一人のひとと組んでやってきた音楽作りが、9年位した所でガラッと体制が変わって、全く新しい人達と組んだのがその「夕凧LOOP」というアルバムの時なので。その時期がすごく大きな変化でしたね。

——その時に、それまではプロデュースされたり共同作業だった音楽制作が、自己発信へと変わって、改めて自分は何がやりたいのか？と考えたことはありましたか？

坂本：その時はもう、そうするしか他に道が無いぐらい、それまでの9年間に色々なことをやってきて、行き詰まったとまでは言わないんですけど、「この先、更にどうしていけばいいんだろう？」みたいな気持ちがあったんですね。なので体制が変わって、また未知なものに飛び出していくことで、もう一回、自分の歌とか自分らしさを確かめるために、かなり勇気のいる決断をしたんです。

だから、この5年、6年の間に得たことって、すごく大きいんですね。それまでが温室の様な所ですごく大事に、ある種家族と一緒に過ごしてきた時期だとして(笑)。その後は、独り立ちして色々な人と出会う中で、いちいち自分のアイデンティティーを問われ続けた6年間で。その間に自然と、坂本真綾という者の音楽の中で、これはアリかナシかという判断基準がすごく明確になって、迷いが無くなってきましたね。

だから今、音楽を、作品を作っている中で「どうしたいか？」というビジョンはもちろんありますけど、自分として何が好きだ、何がいいと思っている、何が私らしい、私らしくない、みたいなことの迷いが無いですね。それが大きな変化なのか、成長なんだと思います。

——15年の音楽活動の中から30曲を選ぶのは大変な作業だったと思いますが、どんな基準で選曲したのですか？

坂本：百何十曲も歌ってきた中で選ぶので、思い入れとかで選んじゃうと、線が引けないので限界が無いんですね。だから、まず最初に30曲という枠をもう決めてしまって。たまたま30歳の誕生日のリリースだし、30曲がキリがいいみたいなことで、そこにピックアップした中からはめ込んでいったんです。15年やっていて、ベスト盤は今回が初めてだったので、まず分かりやすいベストであることを心掛けて。坂本真綾を今までよく知らなかった方にも、「はじめまして」と言った時にこのアルバムを持って行って、「15年間こんな歌を歌ってました」って名刺代わりに渡せるようなラインナップにしたい。でも、それが人の思う坂本真綾の30曲だったかどうかは分からないんですけど、私の思う30曲を

詰め込みました。後は、自分の活動の中でターニングポイントになった曲とか、その年齢、そのアルバム毎に一番自分自身のテーマになっていた曲を必ず入れようと思いました。

——歌手としてだけでなく、声優としても活躍されていますが、自分の声質についてはどのような特徴があると思いますか？

坂本：自分の声って、誰でも違和感があるものだと思うんですよね。自分で聞いている声と録音した声の違いに、みんな驚くと思うんです。私も長年それがあって、「声が好き」と言われることも多かったんですけど、「意味が分からない」という、どこが自分の声のいい所なのかがよく分からなかったんですよね。でも大人になって、色々なミュージシャンの人とコラボレーションするようになってからは、楽曲ごとに違う出会いの中で、自分の声の一番いい成分が抽出されるように、いっぱいディスカッションしたり、色々な方法を試したりする機会が多くなって。初めて自分の声をちゃんと意識して聴くようになると、自分でもなんとなく好きな所が見つかってきて、今は違和感なく聴けています。「どういう声か？」と言われると、空気穴が空いている感じというか、あまり密度がべったり濃くなくて、スカスカしてる声だなと思います。でも、そこが好きです（笑）。



写真拡大

坂本真綾 [写真一覧\(5件\)](#)

——ちょうどこの前、CSのアニメチャンネルで「天空のエスカフローネ」と「鉄のラインバレル」を続けて放送していて、ベスト盤にも収録されている「約束はいらぬ」と「Remedy」を聴いたんですけど、この2曲の間に10年以上の時間が経っているとはとても思えなくて。ご自身としては15年を振り返った時に、自分の歌い方や声質の変化を感じますか？

坂本：声質は誰でも15、16歳の時とは年齢と共に変わるので、その変化はあると思うんですけど、私も15年前の曲を聴いても「わあー！懐かしい」とは思わないんですね。それぐらい、ずっと共にあったものという感じがあって、あまり古くなっていないんですよ。だから、今回ベスト盤に入れるのに曲順を決める時も新旧織り交ぜて、時系列ではなく、デビュー曲の次にいきなり新録が入っていたり。順番は時代に関係無く並べたんですけど、あまり変にデコボコして聴こえないのはすごいなと思いました。声質とか歌い方を変えようと思って変えたことはないですけど、自然と変わってきた流れがあっても、滞らずにずっと流れてきた中の出来事なので、違和感が無いのかな？と思いました。

——ずっとご自身で歌詞を書かれていて、もちろんアニメなどで使用される場合は物語の世界観に寄せている部分もあると思いますが、自分の好きな伝えたい言葉や、歌詞の書き方などの特徴は変わらないのか、それとも変わってきたと感じますか？

坂本：15年前に、当時は共作でしたけど、作詞というものに初めて触れた「Feel Myself」という曲が今回ベスト盤にも入っています。改めて歌詞をじっくり読み返してみたら、今に繋がっていて。表現の仕方は変わっているけど、やっぱり根底にある言いたいことは変わらないんだなって改めて感じたんですね。だけど、ずっと辿っていくと、10代とか若い頃の方が、言葉の選び方がすごく遠回りで。それが一つの持ち味で、良さでもあったんですけど、やっぱりすごく格好つけていたし。今の方がある種開き直っていたり、照れずにシンプルに言葉を選べていたりして、昔は真っ直ぐでいることがすごく恥ずかしかったような感じがあるんですよ。でも、年齢を重ねるとどんどんシンプルになっていって、言葉の選び方もすごく直球になったと思います。

——「夕凧LOOP」以降の作品のジャケットを見ていて、髪型やファッションなどビジュアルイメージが変わった印象があるんですけど、ファッションの好みが変わったと感じることはありますか？

坂本：普通の人趣味が変わる程度には変わったと思いますけど、基本的にはそんなにファッションに一生懸命なタイプでもないのだから(笑)。私は写真を撮られたりすることがものすごく嫌なので、「坂本さん、撮りますよ」と言われるとすごく嫌なんですけど、ジャケットはその時のアルバムや曲に合わせてシチュエーションを決めて撮るんですね。そうすると演じている気分になるので、役者モードで乗り切れるみたい。だから、ビジュアルはファッションというよりも、コンセプトに合わせて変わってきたかなと思います。

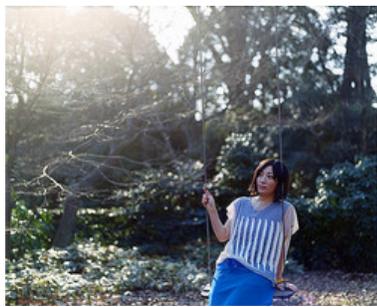
——写真嫌いは、15年経っても変わらないですか？

坂本：変わらないですね。でも、昔より今の方がよっぽど頑張っていると思います。

だって最近、PVなんか撮り始めちゃったので(笑)。ここ何年かは信頼できる、すごく慣れたスタッフが増えてきたので、ちゃんと毎作撮っているんですけど。本当にPVは嫌いだったので、それまではもう5年に1回ぐらい撮って、3作ぐらいあったかな？みたいな感じだったんです。

——声優のお仕事と通じる部分があるかもしれないんですけど、あまり自分が表に出たがるタイプではないんですかね？

坂本:そうなんですよね。こんな仕事をしているのに、そういうことを言うとあまり信じてもらえないんですけど、意外にそういう人って多いと思うんですよね。役者さんでも、役をやっている時は何でも出来るけど、自分、個人に戻るとすごく照れちゃうみたい。役者としての活動って、自分ではない者になれる面白さがある。でもミュージシャンとして、坂本真綾という本名でポスターが出ていたり、トラックが走っていたりすると、もうどうしていいかわからないぐらい恥ずかしいみたい(笑)。



[写真拡大](#)

坂本真綾 [写真一覧\(5件\)](#)

——アーティスト坂本真綾として、音楽活動を15年続けて来られた理由は何故だと思いますか？

坂本：一言で言うと、好きだったからだと思いますね。役者としての、自分ではない者になれる楽しさは、ある種コンプレックスから来ているのかもしれないと思っていて。自分はずまらない人間だとか、オリジナリティが無いという想いがずっとあって。だから、別者になれちゃうことが、自分にとって解放の場だったんですね。

だけど、音楽と出会ってからは、また改めて自分に帰って来なきゃいけない。全てが個人に帰って来ちゃう場で、それがしんどい時もあるんですけど。色々な役を演じて、何色なのか分からないと思っていた自分が、坂本真綾として表現できることとか、言いたいことを発していける場だったので。

この二つが揃った時に本当にすごくバランスがとれて、どっちが大事とかではなくて、音楽と役者の両方があるから、今までやってこれたと思うんですね。音楽で得たものが、書くことだったり、役者としてだったり、色々な場面で生きてくることもあったし、その逆もあったし。私の場合は広く色々な形で自己表現できたことが、これだけ長く続けられた要因なのかもしれないと思います。

——普段はインターネットの他、テレビ、ラジオ、雑誌、新聞など、どこから情報を得ることが多いですか？

坂本：まず、テレビはほとんどつけないので、昔はラジオっ子だったんですよ。でも、今は外で仕事していることが多くなって、スタジオに入っていて、「そういえば、アレ何だっけ？」みたいな時にすぐ調べられるので、ネットが繋がっていないと不便を感じるようになりましたね。結局一日テレビもつけず、ずっとスタジオにいてニュースも見なかった、みたいなこともいっぱいあるので。ニュースもネットで見るようになったのは本当にここ最近の習慣ですけどね。それまでは、「あそこのお店何だっけ？」「ちょっと待って」みたいな、すぐにノートパソコンを開いて調べる人がいるじゃないですか。「何それ？今っぽい、もうすごく嫌」みたいな批判的な目で見ていたのに、最近は自分がそういう風になってきちゃって、「現代人なんだわ、私」とか思うようになりました(笑)。

——ファッションの他、部屋のインテリアで色や形など、こういう傾向の物が多いというのはありますか？

坂本：本当に男の部屋みたいだなと思うぐらい、あまり可愛い物とかは無いんです。女の子の部屋に行くと、みんな人形とかがあったり、可愛く「女子！」という感じがすごく緊張しますね。「こういう部屋、ドラマとかで見たことがある！」みたいな所に住んでいる人に比べると、特に飾り気のない、木目みたいなナチュラルなものが多いです。ただ、本がすごくいっぱいあるので、家の中が本屋みたいになっていますね(笑)。

——お仕事から頭を切り離してリラックスしたい時にすることや、自分にとっての癒しはありますか？

坂本：私もそれを知りたいですね(笑)。休むということがよく分からなくて、休みの日も

全く自分をオフにするやり方が分からないんですよね。本を読むのが好きで、ストレス解消にもなるので、読んでいる時はもちろんその世界に没頭できるんですけど。どこかでそこにインスパイアされて、表現に生かそうと想着いたり、そこから何か考えさせられたりして、常にどこか自分の仕事に結びつけちゃうので。でも、「とにかく、ちょっと切り離さなきゃいけないな」と思って、去年ヨーロッパに一人旅で5週間行って来ました。旅行とか特に一人で行くのが好きですけど、国内でも行ける時はポツと行ってみたい。



写真拡大

坂本真綾「everywhere」初回盤 / 010年03月31日発売 / 3,780円(税込) / VTZL-15 [写真一覧\(5件\)](#)

——去年は東京・名古屋・大阪でツアーをやられましたが、今まではあまり表に出がらない性格もあってか、ライブを見られる機会が少なかったですよね。今回はベストアルバムの発売と同時に武道館でライブをやられますが、今後ライブについてはどのようにしていきたいと考えていますか？

坂本：去年のツアーが私にとってすごく大きな変化というか、何か一つ開けたきっかけになったんですね。ずっとライブに対してあまり積極的になれなかった部分もありますし、表現のジャンルとしてライブにどう挑んでいけばいいのかイメージが沸きにくかったんですね。だけど去年「根拠は無いけど、今なら何か出来そう

な気がする」という想いが突然生まれて。やってみて、ライブってこちらがすごく完成された、完璧なものを用意して発表しなきゃいけないという先入観があったんですけど、もちろん完璧な方がいいに決まってるんですけど、ライブってその時に生まれるものをみんなで共有することだし、私個人が完成されてるかどうか以上に、お客さんからもらえるものがあって初めて完成するものだから。

コミュニケーションという風にモードが切り替わってから、その場の空気の中で何が生まれるかを私も楽しめるようになったし、すごく楽にもなりましたね。もちろんエンターテインメントとして見せるということは常に考えてなきゃいけないし、それありきなんですけど。今はライブという自分の中で新しい表現の場が生まれて、すごく楽しくなってきました。まず武道館がありますけど、これから先ライブという場でやってみたいことがまだまだいっぱいあって、今はすごく積極的に思っています。

——今回CDデビュー15周年“第一弾”とありますが、第二弾の予定はあるんですか

坂本：そうですね。第一弾と書いてあるから、第二弾があるんでしょうね(笑)。まずは、この一連が終わるまではアレですけど…。

——今後やっていきたいと考えていることはありますか？

坂本：30歳を迎えたんですけど、今すごく30代が楽しみです。20代の間って、色々なことを経験して吸収したり、失敗したりする時代なのかなと。30代に入ってから、やっと今まで得た経験が、自分で力に換えていける時代に突入するのかな、という気がしています。これから起こること全てに対して、すごく楽しみなんです。仕事という意味ではもう結構、舞台 だったり歌だったり、書くこともそうですし、演じることもラジオも、色々なことをやっているように見えると思うんですけど、私の中では全部が繋がっていて、“表現”という、一つの大きなものの中の色々な側面が見えていると思うんです。

「これから新しいことをどんどん開拓してやってやる！」というよりは、今は時間を掛けて自分の中で築いてきたものを、もっと深く掘っていききたいとか。広げていくというよりも下に掘って、根をもっと奥へ這わせていききたい、みたいなイメージですかね。長年やってきて分かることがいっぱいあって、続けてこそ身になってくるものを今、体感して、すごく大事だなと思っているので。「更に時間を掛けたら、これからどうなるんだろう?」「自分

の中で何が分かってくるんだろう？」というのをすごく知りたいので。今あるものを、更に突き詰めていきたいという想いですね。

——写真を撮られるは苦手かもしれませんが、どん どん表に出てきてくれると嬉しいです。

坂本:いやあ、もう。それはどうでしょうねえー(笑)。

——今後も楽しみにしています。

坂本:はい、ありがとうございました。

・[坂本真綾](#) - アーティスト情報